

Fate/princess knight

ジャックハルトル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少女は戦う、叶えたい願いのために。

英雄は戦う、少女達の願いのために。

更新は早めに行きつもりですが、いつ投稿するって言うのはラダムになります。

目次

第3話	25
第2話	16
第1話	5
序章	1

## 序章

レジェンドオブアストルム…と呼ばれているゲームをみんなは知っているか？

このゲームでは『プリンセスに輝いた少女とそのパートナーの願いが叶う』と眉唾物の噂がある。

だがもしもこのゲームがゲームではなく、現実に異世界に行つてプレイしているのだとしたら？

現にこのゲームをやつていてゲーム中に死亡し、そのまま現実でも死んでしまった者も少なくはないのだという…

実際にこのゲームは販売も回線も既に無くなっている…だが、本当に異世界に行つてしまったプレイヤー達は？

彼ら、彼女らはこう願いをかけるんじゃないか？

『元の、現実の世界に帰りたい…』と

だがプリンセスに選ばれるのはたったの一人、プリンセスの願いを叶える『聖杯』は

たったの一つ、取り残されてしまった少女達は7人…

これは彼女達がサーヴァントと呼ばれる過去、未来で死んでしまった英雄の霊、英霊と共にプリンセスを目指し行われる戦争…

今まさに『聖杯戦争』と呼ばれる戦いの幕が開ける。

—————

高い潜在魔力と秘めたる才能。

困っている人を見ると放つて置けないトラブルメイカーな高校一年生。

マスター

《春咲 ひより》

『わわっ、すっごいんだね！さっすが私のサーヴァント!!』

半人半神と謳われ、必殺の魔槍『ゲイボルグ』を持つアイルランドの大英雄。

ランサーのサーヴァント

《クー・フリーン》

『ははっ！つたりめえよお！嬢ちゃんは黙って俺に守られてればいいんだよ』

帰る理由が彼女にはある……例え血が繋がっていなからろうと、自分をいつまでも見守ってくれる兄の元へ。

マスター

《衣々咲 莉乃》

『なんかだか、もう一人のお兄ちゃんが出来たみたいで嬉しいな……』  
百を救う為に一をも救おうとし、百一に裏切られた未来の英雄。

アーチャーのサーヴァント

《エミヤ・シロウ》

『いいだろう、私は兄としてマスターを……いや、莉乃を姫にしてみせよう』

2

元の世界へ帰る？なんで？なんで？

既に死した彼女には現世への執着はない、あるのはただ……生への渴望。

マスター 《出雲 宮子》

『ねえねえお兄さくん、プリン買ってきて欲しいの〜』

架空の英雄……されどその実力は空を翔ける

燕すらも切り裂く神速の剣。

アサシンのサーヴァント 《佐々木小次郎》

『ふむ、今宵は宮子と月を愛でたかったのだが……やはり可憐な女子の隣には可憐な菓子が似合うか』

彼女はこんな生活を望んでいたのかもしれない、アニメのような展開、漫画のような出会い……そして楽しい酒飲み仲間。

マスター《綾瀬 ゆかり》

『あつはっはっはっ、まだまだ飲むわよおー！ほらっサーヴァントならお酌しなさいよお〜』

『王』それはこの征服王の為にある言葉…

全てを飲み込む数多の英雄を従える最強の騎兵。

ライダーのサーヴァント《イスカンドル》

「がっはっはっは！美人のマスターと飲む酒はいつにも増して美味しいのう！ほれっ、秘蔵の酒も振る舞うぞ!!」

—————

人に逢うては人を救い、悪に逢うては悪を切る…腕っ節ならサーヴァント並の生命を持ったバグ。

マスター《太刀洗 流花》

』

時代の合間に現れ、時代と人を落とし堕とす。

タマモナインの一角にして最優の嫁兼魔術師。

キャスターのサーヴァント

《玉藻の前》

『女のマスターですかあ…ん〜、でもなんとなくイケメンの香りがあるのでいいでしょう。私がいればどんな問題もズバツとみこつと解決してみせましょう♪』

—————

恋に恋するお年頃、しかしその心には一本の硬い芯をもっている。

今回の聖杯戦争において最強最高の魔力を持つ。

マスター《草野 優衣》

『あわわわわっ、ダメだよそんな凄い恋愛観は持ってないよ！…わ、私は草葉の影から見てるのがお似合いだよ…』

ヤンデレ…それはこの人の為にある言葉なのだろう。

愛する者にうらぎられた悲しみと憎しみは己の身を竜に変えた。

バーサーカーのサーヴァント《清姫》







そして光を放つ魔法陣が一層強く輝くと何かが魔法陣から飛び出し、一直線に化物へと人影が疾った。

「……g a a a a a a a!!」

その人影が化物の横を通り過ぎたかと思うと突然化物が苦しみ始めた。

少女は既に焦点もあっていない目でその人影を見つめているところには…美しい金の髪を後頭部で結った青と銀の騎士甲冑を身に着け、光り輝く剣を正眼に構えた少女がその目に映った。

「……なるほど、事情は概ね理解できた、貴様が犯人だな？」

我が聖剣の錆になりたくなければ早々に消えろ!!」

化物は一足飛びでその場を離れ、辺りには再び静寂が戻ってきた。

「……たす、けて…」

「酷い傷ですね、普通に対処していたら間に合わない…」

騎士の少女は「仕方ないですね…」と言いながら少女の傍に座り、胸に手を添えた。

「……アヴァロン!!」

少女の持つ剣に良く似た、盾のような物が倒れた少女に重なるように現れた。

すると、少女の傷がみるみるうちに塞がっていき、致命傷かと思われた傷が治ってしまった。

「これで…よし、動くのは血が足りないのもう暫く無理でしょうが大分楽になったはずです…どうですか？」

「凄い…こんな回復力のある魔法なんて聞いたことがないよ……」

「その説明は後からにしてもよろしいでしょうか？」

「わ、わかりました…あ、でもこれだけは言わせて下さい」

「はい、なんででしょう？」

首をコテンと傾げる姿には先程までの凛々しきは無く、年相応の可愛らしい少女にしか見えない。

「私の名前は『士条 玲』です、先程は助けていただきありがとうございます、本当に助かりました」

「礼などいりません、私は騎士として…いえ、人として当然の事をした

「まです」

「あの……よろしければ名前を教えてくださいませんか？」

「そうですね、ついでに聞きたい事も色々あるので名乗りましょう」  
騎士の少女は立ち上がり、玲を正面に見据えてこう言った……

「私はセイバーのサーヴァント、名はアルトリア・ペンドラゴン……」

「問おう、貴女が私のマスターか？」

「サ、サーヴァント？マスター？アルトリアさん……でいいのかな？」

「ちよつと言ってる意味がよく分からないんだけど……」

「むっ……まさか何も知らずに私を召喚したと？……そうですね、では右手の甲を見て下さいますか？」

「チラリと言われた場所を見ると、さっきまでは無かったはずの刻印の様な物が刻まれていた。」

「あれ？こんなのがあったかな？」

「それは『令呪』というものです」

「れいじゆ？」

「はい、それがあれば3回まで私に強制的な命令をする事ができます。」

「例えば……そうですね、遠く離れた所から空間を飛んで瞬間移動が出来たり来たり」

「私は絶対にしたくありませんが、令呪を使えばこの世界の民を皆殺しにするなどと言った命令も強制的に行わせる事が出来ます」

「二つ目のは私もやりたくないからいいけど……瞬間移動……本当に？」

「はい、それだけでは無く、例えば私に今後、語尾にニヤンをつける……と命令すれば私はそれに従わなくてはなりません。」

「もちろん令呪にも制限があり、一生などの永久的な効果、魔力を無限にするなどの強化といったものはかなり厳しい制限をされますね」

「へえ……って、命令を出すの？私が？」

「あまりの事態に頭が付いて来てないのか、先程のショックで耳に入っていないかったのか、どちらにせよ助けられた自分が命令を下すなど……むしろ命令されても素直に従えそうなのに……」

「貴女はマスターで私はサーヴァントです……その手の甲に現れた令呪」

が良い証拠ですよ」

「そっか……まだあんまり理解出来てないけど、取り敢えずは私のパートナーって思っておけば良いのかな？」

「はい、その認識で大丈夫ですよ、マスター」

マスター……と呼ばれた玲は何故か赤くなつた頬をポリポリと掻くと「いやあ……あはは……」と照れ笑いをした。

「どうかしましたか、マスター？」

「あ、あのさ……そのマスターっていうの止めてもらつてもいいかな？」

君みたいな子にそんな風に呼ばれると妙に気恥ずかしくて……」

「そうですか……ではレイとお呼びしましょう」

「私はなんて呼べばいいかな？アルトリア？」

「はい、それで結構ですよ」

「うん、わかつたよアルトリア。」

……って、あれ？ペン……ドラゴン、聖剣……」

玲はそう呟くと『いや、まさか……ん？』と言つたきり黙り込んでしまった。

セイバーはその様子を見て……

「ああ、では玲にわかりやすい様に言い換えましょうか。」

エキユス………エキスカリバーと言う剣を知っていますか？」

「(囁んだ……) うん、有名だからね」

「ブリテンの森の奥深くにある泉の精霊から受け取った私の愛剣、つまりこれが真正銘本物のエスカリバーです。」

本名をアルトリア・ペンドラゴン……つまり私はアーサー王本人という訳です。

恥ずかしながら」

森に玲の叫び声が再び上がることになったのは仕方のないこと。

二人はそのまま非殺傷エリアであるアストルムの王都・ランドソルまで戻っていった。

道中現れる魔物は、魔物が可哀想になるほど、玲と雑談中のアルトリアに瞬殺されていた。

.....

ランドソルに着いた二人は、取り敢えず話をしたいのと空腹を満たす為に深夜でも開いている食堂に入ってしまった。

「やつと落ち着けたね」

「そうですね…でも大丈夫なのですか？」

結構刺激的な体験をされたと思うのですが…」

「ああ…慣れてるって訳じゃないけど、死にそうになる事は今までも何回かあったからね。」

そんな事よりも、まさかアルトリアがあのアーサー王…」

「レイ、あまり人のいるところでは…痛い人だと思われます」

「そ、そうだね。それはそうと…」

食堂の席は空いていたので、先の話をするために奥の方の席で食事をしているのだが……

「もきゅもきゅ…」

「よく食べるね……」

「もきゅ？もきゅもきゅもきゅもきゅきゅ（はて？まだまだ食べるつもりだったのですが）」

みるみる内に目の前に積まれていく皿の山、それを見てみると玲は軽く食べただけで腹が膨れてしまいそうだった。

「サーヴァントってのはみんながみんなそんなに食べるの？」

「もきゅもきゅ、ごくんっ…いえ、その…お恥ずかしい話ですが、これほど食べるサーヴァントは恐らく…少ないです」

しゅん…としてしまったアルトリアを見て、なんだか悪い事を聞いてしまったなと思った玲はポンつとアルトリアの頭を撫でてみた。

「いいんじゃないかな、そうやって食べてる姿はさっきの戦ってるときと違ってなんだか可愛いらしいしね」

「むっ…か、可愛らしいなどは失礼な、私は王になる為女を捨てた身…そんな事を言われても嬉しくありませんへへ……」

アルトリアのアホ毛がまるで犬の尻尾のようにブンブンと振られている、実はかなり嬉しかったのかもしれない。

玲はそれを見て、何かのタガが外れたきがした。  
否、外れた。

「ああー！もうダメっ、我慢出来ない！  
何でアルトリアはこんなに可愛いかなあ！」

「な、何をするのですかレイ!?」

「ああ〜もうっ可愛いなあ！」

「ちよっ、い、一旦止まって下さい！」

そう言われてしまえば惜しみつつではあるが、玲はアルトリアを解放する事にした。

撫で終わると、アルトリア突然真面目な顔をした。

何だろうと思ひ、姿勢を正して玲の話を見つめて聞く事にした。

「どうしたの？」

「……レイ、サーヴァントはお互いが近くにいと感覚的にその魔力の量から相手を感じ出来るのです。

本来は【霊体化】をする事でそれを避けるのですが、何故かこの世界では霊体化では無く【アバター化】というものに変更されています。

これがどういう物か使ってみない事には確証を得られませんが、どうしましょうか？」

「アバター化……もしかして何だけど、そのアバター化っていうのを使ってから【シエル】って唱えてくれる？」

【シエル】というのはアストルムを始めれば誰もが最初から使える初級回復魔法、もしそれが使えたなら……

「そうですね、では試してみましようか、危険な物では無いようですし」

「じゃあ、お願い」

「ではまずアバター化を……よし、と言っても見た目は全く変わりませんね。

強いて言うなら玲からの魔力供給が切れて私自身の魔力を運用するしかなくなった感じですね」

「それって不味くないの？」

「アバター化さえ解けば再び玲からの魔力供給が始まるようですし、この状態で常に魔力をポンポン使ったりしない限りは問題無いでしょう」

「アルトリアが問題ないって言うならそうなんだろうね。」

「じゃあ、そろそろ頼むよ」

「分かりました、それでは……」

【シエル】

アルトリアがそう唱えるとホワつとした柔らかい光がアルトリアの身を包み込んだ。

「やっぱりね」

「やっぱりとは？」

「そのアバター化っていう能力は多分だけど……私達がこの世界に閉じ込められたっていう事は説明したっけ？」

「いえ、現界する際にこの世界の常識やルール、その他の必要な情報は全て与えられているのでレイ達の状態もなんとなくは理解しています」

「そっか、じゃあ話は早いね。」

この世界を元にした【レジェンド・オブ・アストルム】っていうゲームはね、私もなんだけどもんな最初にアバターっていう自分の分身みたいな物を作り出してこの世界に投影しているの。

もうちよつと詳しく話すならmimiっていうゲーム機が私達の身体データをスキャンして、そこから私達の見た目に近い、理想的な見た目のアバターを作り出すの」

「なるほど……ではこのアバター化の能力を使うと、この世界の住人になる事が出来るという事ですね」

「そうだね、この世界が現実から……まあこの世界も現実なんだけど……私達の世界からこのアストルムが切り離されたときにレベルっていうシステムが無くなったんだ。」

だから単純な戦闘能力で戦う事になるだろうからアルトリアは変わらず強ままのはずだよ」

そう、ゲームとしてのこの世界ではレベルを上げてステータスアツ

プするそして魔法を覚えて行き、全プレイヤーの頂点【プリンセス】を目指すゲームだったのだが、ゲームから切り離され、現実と化したこの世界にはステータス：つまりレベルというシステムが消えているが、レベルの代わりに身に付いた身のこなしや戦闘技術によって、レイ達の元いた世界【地球】から来た住人達は一様に強くなっていた。「分かりました、ではもう一つ質問を…」

「ん？なにかな？」

「あの黒騎士は一体何だったのですか？」

私のいた時代でもあのように邪悪な化物はいませんでした。

最初はサーヴァントかとも思いましたが、しかし、あの黒騎士から感じられる気配はサーヴァントとも違いました」

「ああ、アレの事か…」

言い淀む玲に、少し酷な質問をしてしまったかと心配になったアルトリアだったが、それは杞憂で終わった。

「それは私が答えるよ、玲ちゃん」

レイは聞きなれた声を聞いて、沈んでいた顔を上げた。アルトリアは突然現れた【二人組】に警戒心を覚えた。

「久しぶりだね、優衣」

「レイ、お知り合いですか？」

「うん、このゲームを始めた当初からの友達だよ」

アルトリアはそれを聞いた途端、アワワワと慌ててその場に土下座した。

「も、申し訳ありません！」

「あ、頭を上げてください！」

知らない人からいきなり話しかけられたら警戒するのは当然です！

むしろ私が謝らないと…」

「あ、あはは……とところで優衣、そちらの方は？」

「えっ!? あっ、この人はね……」

「大丈夫ですよ、自己紹介くらい自分でさせて下さいな。」

「ほんっ…では、私は優衣のパートナーをさせて頂いている

【清姫】というものです」

清姫、と名乗った少女はライトグリーンを更に薄くしたような腰まで届きそうな長髪、まさに大和撫子と言わんばかりの雰囲気と神秘的な美しさと可憐さを併せ持つ着物の少女だった。

「では私も遅れ馳せながら自己紹介をさせてもらいましょう。」

私は玲とパートナーを組ませてもらっているアルトリアと言うものです、以後よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「凛々しいお方ですわね」

お互いの挨拶が終わったところで、玲が気になる事を聞いてみる事にした。

「清姫…というところ？」

「はい、あの【安珍清姫伝説】からお名前を拝借しております」

「じゃあ君の前では嘘だけはついちゃいけないね」

「そうですね…嘘だけはやめていただきたいですね…【嘘】だけは…ふふっ」

玲は薄ら寒い物を感じて、あははと愛想笑いをしているが、アルトリアは???.を頭に浮かべ首を傾げていた。

「じゃあ説明するね」

ユイは『ちよつとゴメンね』と言いながら玲の隣に、清姫は『申し訳ありません』と言いながらアルトリアの横に座った。

こんな感じで

玲、優衣

机

清姫、アルトリア

「それじゃ話すね。」

玲ちゃんが見たのは偶々黒騎士の格好をしていただけで色々な見た目があるみたいなの、彼らは通称【スレイブ】…噂話によると、数々の英雄や伝説、神話や物語の人達がその黒騎士のように召喚されるらしいの」

「……っ…そう…ですか」



数々の英雄……なるほど、彼等もまた世界に使役されるサーヴァント（使い魔）という訳ですか……それにしてもスレイブ（奴隸）

とは、名のある英雄とは言え……哀れですね。

「ア、アルトリア……それってまさか（小声）」

「ええ、間違いなくサーヴァントと同種の者達ですね（小声）」

急に机に乗り出してコソコソと話し始めた2人を怪訝に思ってたか、清姫が2人を少しだけ睨む。

美人の睨みほど怖いものは無いので玲とアルトリアは2人揃って

『あ、あはは……』と苦笑いをしながら椅子に座りなおした。

「もう、そんなにコソコソと話してないで

私達にもお聞かせくださいませんか？」

「え、ええーと……」

玲が言い淀んでアタフタしていると、清姫は着物の袖を口に当てて『ふふっ』と笑いだした。

「冗談ですわ、あなた達があんまり可愛らしいものだからつい……ね？」

「も、もうっ、ダメだよ清姫ちゃん初対面の2人に失礼じゃない！」

「ふふふ、あなた達は本当に可愛らしいですね」

「でも本当にありがとう、優衣も清姫さんも……久しぶりに優衣と会ったらなんだか楽になって来た気がするよ」

「私からも御礼を言わせてもらいます、レイの不安は私だけでは取り除けませんでした……それに、貴重な情報を教えていただき本当にありがとうございます」

「そんなの気にしなくてもいいよ、私達友達でしょ？」

また困った事があったら言っただけ、私がすぐに駆けつけるから！」

「あら、私は仲間外れですよ？」

「も、もちろん清姫ちゃんも一緒に駆けつけるよ！」

「それでこそ私のパートナーですよ」

「もう……からかわないでよね。」

それじゃあ、久し振りに玲ちゃんの顔も見れた事だし、そろそろお暇させてもらおうね」

「うん、ありがとうね、優衣、清姫さん」



## 第2話

昨晚の出来事が嘘だったと思えるような快晴を迎えた朝。

普段は凜々しい玲からは想像出来ない寝相によつて、シーツや毛布がぐっちやぐっちやになつていた。

「ふあゝあ……よく寝た……」

まだ頭がコクリコクリと船を漕いでいるがいつも通りの時間に起きた玲はフラフラとした足取りのまま手洗い場で顔を洗い、少しだけシャキツとしたかと思えばトイレでパジャマとパンツを足首までずり下げた状態で寝始める。

ハツと飛び起き、何故トイレで寝ていたのか困惑しながら台所に向かい朝食を作り始める。

これが士条 玲の朝だ。

「なぜ私はトイレで寝ていたんだろう……」

分かりきっている事を自問自答していると

背後で何者かが立ち上がる音がした。

昨日の事がトラウマになり少しビクビクしながら振り向いてみると……

「おはよう、（ツギ）います……レイ……」

寝ぼけ眼のアルトリアが起きてきた。

嫌がるアルトリアに令呪を使うぞと脅して着せた着ぐるみパジャマ（ライオン）姿で。

生来の可愛いものの好きである玲がその姿を見て我慢出来るわけもなく……

「アルトリアー！！その格好は卑怯だよおおお！可愛すぎるよー！！」

「うわっ！な、何をするのですか

レイっ!?突然抱きつかれては倒れてしまいまっうわわわわ!!」

ドターン！ゴスッ！

「痛たたた……レイっ！危ないじゃ無いですか！」



「ど、どどどどどという事!？」

「はい、それが……」

事の成り行きをアルトリアが話す中、優衣は既に治癒魔法を使い、玲がただ気絶しているだけという事は分かった。

分かつてはいたのだが……

「清姫ちゃん清姫ちゃん」

ちよいちよいと手招きで清姫を呼んだ。

何ですか？と言いなながらも来てくれた清姫に対して、優衣はとんでもない事を言い出した。

「玲ちゃん、バリバリ生きてるんだけどね……ちよつとアルトリアちゃんに悪戯してもいいかな？（ひそひそ）」

「私に嘘をつけと？（ひそひそ）」

「アルトリアちゃんの可愛いところ見たくない？それにこれは嘘じゃない、ドツキリって言うんだよ（ひそひそ）」

「ドツキリ……聞いた事がありますわね。」

分かりました……やりましょう（ひそひそ）」

清姫からの了承を受けた優衣は嬉々としてアルトリアに嘘、否！ドツキリをかます事にした。

「玲ちゃんが死んでる！」

「!!」

「おいたわしや玲様……ううっ……」

悪ノリに重なる悪ノリ……アルトリアは玲の胸が上下しているのに気が付かず、顔を真っ青にしている。

「そんな……私の、私の所為だ……」

項垂れる姿はまさしくライオンそのものだった。

床にポタポタと雫が落ちる、玲を想い……そして、自分の不甲斐なきに。

「……どうしよう清姫ちゃん、凄く胸が痛くなってきたよ」

「……私達はとんでもない事をしでかしているような気がしますわ……して。」

「うう……レイ……どうして、何故こんな所で死んでしまったのですか

……」

「??死んでない。」

「レイ……うわああああん!!」

泣き叫ぶアルトリアを見ているとどうしても悪い事をしている気がしてならない……

いや、実際悪い事しているのだが。

優衣はいつ、ドツキリ成功プラカードを掲げるか頭を考えフル回転させていた。

清姫はいつ玲が起き上がってくれるか、今か今かと待っている。

「アルトリアちゃん、謝らなくちゃいけない事があるの……」

「何……まさかっ！貴女がレイを殺したのですか!?!」

「違うよ!?!」

「では貴女か！清姫!!」

「何故そうなりますの!?!」

「怪しい……貴女達でないとしたら一体誰が。」

「……っ!?!……私か」

「どうしよう清姫ちゃん、アルトリアさんが思ってたより頭悪いよ……」

「ええ、何故自分が殺したと思いつめるのかしら……」

別にアルトリアの頭が悪いわけではない、むしろ王としての教養があるのでそこら辺の連中よりは頭がいいはずなのだが、レイの死(笑)によって混乱しているだけだ。

アルトリアはすっ……と両手首を揃えて優衣に差し出した。

「……私が、犯人です……ううっ」

どうしよう、凄く言いにくいよ……今更「ドツキリでした!」って言いにくいよ……

「ドツキリでした!」って言ったなら『もろ、ビツクリしましたよユイ!」

ぶんぶん( \*・ω・)『くらの感じで納めれると思いたい!」

この状況をなんとかしてもらおうと清姫をチラッと見てみる。

「……………」

顔を背けられた。

「そうだ……ブリテンには死者を蘇らせる儀式があったような、な

かったような…それを行えばもしかしたら……」

アルトリアは『儀式に必要な物を揃えて来ます！その場で待っていて下さい！』と言い残して宿からダッシュで出て行った。

「……さてマスター？この状況をどう納めるつもりですか？」

「面目次第もございませぬ……」

「はあ……だから最初にやめておけ、と言ったんですよ？」

「で、でも清姫ちゃんだってノリノリだったじゃない！」

「ユイほどノってはいませぬよ！」

自業自得で起こった剣呑な雰囲気…完全な自爆なのだが。

主従のプチ聖杯戦争が始まろうとしたその時、ドタバタとアルトリアが帰ってきた。

余程急いで帰ってきたのだろうか、肩で息をしている。

「ユイ！ドラゴンの生息地を教えてください！」

「ドラゴン!?いや、存在はしてるけどー！」

そうして騒いでいると、もぞもぞと玲が動き出した。

清姫はユイの服をちよいちよいと引っ張ると内証話を始めた。

「玲さんが起きます、逃げましょう」

「うっ…隙を見て逃げようか」

「ううん……頭が痛い……あれ？そんなに慌ててどうしたの、アルトリア？」

「レ、レイ？レイ！レイーっ！うわあああん、レイーっ!!」

頭を押さえながら起き上がった玲を見たアルトリアは感動のあまり、玲に向かって突撃するかのように抱きついた。

「おっと…」

そんなアルトリアを優しく抱きとめると、アルトリアは玲の胸の中で嗚咽を漏らしながら泣いている。

「ああ…思い出した。」

大丈夫、アルトリアのせいじゃないから安心していいよ」

「ありがとうございます〜」

ぐすぐすと泣いているアルトリアの背中を撫でていると、次第に落ち着いてきたのか、暫くすると落ち着きだした。

「そういえば、優衣と清姫が来てたの？」

声が届こえた気がしたんだけど」

「そういえば…いつの間にかいなくなっていますね、きっと彼女達がレイを蘇らせたのでしようね」

「へ？」

何を言っているのか訳が分からない玲は惚けてしまった。

元々死んではないので蘇らせるという表現自体が間違っている上に、レイを死体扱いしたのが優衣と清姫の二人なのでアルトリアが感謝する必要は全く無い。

「でも待つて下さい、あの方達がレイを蘇らせた？」

そんな事はマーリンでも不可能だったはず…余程の魔術、魔法の使い手…はっ！ユイはレイの旧友なので人間であるはず、その可能性は低いでしょう、しかし、清姫は…」

「ア、アルトリア？さっきから何をブツブツ言ってるの？」

「もしかしたら…清姫は、私と同じサーヴァントなのかもしれないです…」

意外なところでバレた。

「そ、そんな訳ないよ…優衣と清姫に限ってそんな…」

「では一度ユイ達に遠回しで聞いてみましょう、そうすれば分かるはずです」

「うん、若干意味の分からない部分があったけど、二人がマスターとサーヴァントじゃなければ問題は無いしね」

玲にしてみれば大切な友人と殺し合わなければならぬかもしれないかもしれない、その事を考えるとどうしても沈痛な面持ちになってしまう。

「では早速呼んで見ましょう…ユイ…ユイ…!!清ひガブウっ！ひたはんらー！！」

「かわいいなあつアルトリアは！」

「おかひいでふねえ…さっぴはひよんだらふぐにひたのでふが…」

「ああっ…何言ってるかわかんないけど舌つたらずなアルトリアもかわい…」

「レイ、はのふはりのひへがほほにあふのはやはりまふか？」



「ん〜…わからない……（何言ってるか）」

「ほうでふは…」

ちなみにアルトリアがふがふが言っていた内容を訳してみると…

『舌噛んだー！』

『おかしいですねえ…さつきは呼んだら直ぐに来たのですが…』

『レイ、あの二人の家が何処にあるのか分かりますか？』

『そうですか……』だ。

「ひたがひはふへうまふはべれまへん（注・舌が痛くて上手く喋れません）」

「ね、ねえ…アルトリア？」

「はひ？なんでふは？（注・はい？なんですか？）」

「怪我、治したいよね？」

「ほれは…ほうでふへほ？（注・それは…そうですけど？）（）」

上気した頬、焦点が合っていない目、唇を潤わすように舌舐めずりをする玲を見てアルトリアは悟った……ああ、またこのパターンか…  
「怪我はね……唾をつけると治りやすいんだよ！」

その瞬間、玲はアルトリアに向かって跳躍した。

およそ人間が出せる限界を超えているであろう速度に、流石のアルトリアも面を喰らったのか、あまりの事態で一瞬身が固まってしまったのかは分からないが、そこは最優のサーヴァント、華麗な身のこなして突撃して来る玲を見事にかわした。

「レイっ！めほはまひへふらはひー！」

ほへに、ふばならばひめはらふいへいまふ！（注・レイっ！目を覚ましてください！）

それに、睡なら最初からついています！（）」

「大丈夫…痛くないから…むしろ気持ちいいから……」

「ひいひいひいっ！はんへんひひひいてまふえんよおお！（注・ひいひいひいっ！完全に聞いてませんよおお！）」

「さあアルトリア…天国に連れて行ってあげるよ……」

縮地と言っても過言ではないスピードでアルトリアに肉薄すると、レイは腰に剣を挿していない筈なのに居合斬りの構えをとった。

「これが……愛の力だよ《ミストラル・ブラスト》!!」

本来ならば剣を用いる技なのだが、パジャマ姿のままなので、そんな物騒な武器は装備していない。

振り切った腕から発生した突風は、まるで巨大な拳に殴られたかのような衝撃をもってアルトリアを襲った。

咄嗟の攻撃に反応が遅れたのか、踏ん張りが利かずに、窓ガラスを突き破りながら外に弾き出されてしまった。

「くっ! はばはーはのへいへましゅしゅにへいほうできはい!? (注・くっ! アバター化の所為で魔術に抵抗出来ない!?)」

それでもなんとか空中で姿勢を直して地面に降り立ったアルトリアは流石だ。

自分達のいた部屋を見るとそこには、瞳がハート型に変わり投げキッスをしてくる玲がいた。

「今行くよ、アルトリア……」

「…………ごくりっ」

「ハアアアアッ!」

「がひできまふね!?! (ガチで来ますね!?)」

2階の窓からグルグルと回転しながら攻撃を仕掛けてくる玲に対して、アルトリアは腕を頭の上でクロスし、防御することに成功した。

ドゴンッ!

という音はその威力を物語るようにアルトリアの足が足首まで埋まってしまっている。

「ぐううっ! ふえやあ!!…………ほんろうにあならはにんへんでふか!?

(ぐううっ! でやあ!!…………本当に貴女は人間ですか!?)」

玲の身体能力は剣闘士、という新たなサーヴァントになれそうな程にアルトリアへの愛が暴走している。

ガードついでに足を掴みそのまま5〜6 m程ほど山なりに投げ飛ばしたが、玲は空中で体制を整え華麗に着地した。

「流石アルトリア……まともに戦ったら勝てるわけがないのは分かっていたよ」

「ならばあひらめへくらはひ! (注・なら諦めて下さい!?)」

「何言ってるか分かんないけど、止めて欲しいならそのハフハフ言いながら舌をペロツと出してるのやめて！」

「ひはひんらからしかたらいじゃないれふか！（注・痛いんだから仕方ないじゃないですか！）」

「カワイイーーーー！！」

「にゃーーーーーーーー！！」

その後、令呪を使うぞと脅されたアルトリアは、玲の命令に渋々従い宿へと戻っていった。

暴走した玲を止める手段はアルトリアになく、組んず解れつニヤンニヤンマツト運動会が行われたとか行われてないとか……

### 第3話

Fate／Princess Knight 5話

チュンチュン、チュンチュン

「……………」

「うくん……アルトリア……へへっ」

隣で寝ている玲は下着のみである、そして自分は全裸である…

「ううっ…まさか第二のモードレッドを…しかも今度は私が授かりそうになるとは……………」

女同士なのであり得ないのだが、アルトリアが『子供の名前はモードブルー?』とか訳の分からん事をブツブツ言っていると隣で寝ている旦那(女)が目を覚ました。

「おふあよお……よく眠れたよ」

「お、おはようございますレイ」

あれ?寝起きのレイが襲ってこない?あつ、そうか…昨日のは夢だっ…

「昨日は…良かったよ」

夢じゃなかったのか…

「と、取り敢えず身嗜みを整えたら朝食でも食べましょう」

「そうだね、今日は行きたい所もあるし」

「行きたい所?」

「それはお楽しみ」

二人はいそいそとベッドから降りて身支度を始めた、取り敢えず服を着て、事後処理をして、顔を洗い、食卓へ。

「あ、そうだアルトリア?」

「はい、なんですか? (もきゅもきゅ)」

「もうハフペロしないの?」

「あ、あれは舌を噛んだだけなのでもうしません!」

少し赤くなつて怒るアルトリアに「ああ、やっぱりアルトリアは可愛いなあ…」と言う玲はきつと、何処か壊れているのだろう…とアル

トリアは納得する事にした。

「ああそうだ、今日はちよつと仕事に行くから付き合ってもらってもいい？」

「仕事…ですか？」

「うん、まあ仕事とは言っても街の掲示板に貼られてるクエストをこなすだけなんだけどね」

「なるほど、人助けと資金集めが同時に行えると言うことですね。

なら私もお手伝いします、食事が終わり次第出かけましょう。

先程言っていた付いてきてほしい、とはこの事だったのでですか？」

「よく分かったね、その通りだよ」

「では、英気を養う為にも沢山食べましょう！」

「…………ソウダネ」

アルトリアの口に吸い込まれていく無数の食材達…本来ならもう暫くもつだけの蓄えがあったはずなのに……

……………

街の中心部に足を運んだ二人は、人だかりと活気に包まれていた。

「おお…すごい人ですね」

「ふふつ、私も初めて見たときは驚いたよ」

掲示板は街のほぼ中央に設置してある。

これは何処の街も同じで、本来ならゲームを始めたばかりの人でも迷わず掲示板に辿り着けるように、という制作側の配慮だった。

本来なら数百、数千万人の実力やレベルが違うプレイヤーが同時に見るものなので、アニメなのでよく見る木の板と紙で作られているのなら、それだけで途方のないサイズになってしまう。

それを解消しているのがこの、通称「クエストボード」と呼ばれるクリスタルだった。

「これは与えられた知識にありましたね。

これですか？」

「そうだね、これに触るとその人の実力に応じて最適なクエストを幾つかピックアップしてくれるの、試しに私がやってみるよ」

玲が結晶に触れてみると…

１ー１ウオン……

結晶からは映像のような物が出てきたので二人して覗き込んでみる。

☆☆☆☆☆☆☆☆

アークデーモンを討伐せよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

赤竜の幼生を確保せよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

近海の主を討伐せよ。

「今は依頼も少ないみたいだね…まあ、こんな感じでクエストを教えにくれるんだ」

「この星マークはなんなのですか？」

「ああ、これはそのクエストの難易度を表していると同時に、その人の強さの指標にもなってるね。

難易度は最大が11、最小が1って感じだね。

とは言っても11のクエストは、ある条件が揃った時に一定の人数のみが選抜されて、その人達しか受ける事が出来ないらしいんだ」

「星8って事はレイはそのこの世界での上級プレイヤーだったのですね…素晴らしいです」

「……昔は優衣と後二人いたんだけどね…その時は星10クエストまで出たくらいなんだよ」

「なるほど、レイが筆頭に立ち皆を率いて戦う姿はさぞ美しかったのでしょうね」

「そんな事ないよ、リーダーは私じゃなかったしね」

「ほう…レイやユイを率いるとなれば相当の実力者だとお見受けします、いつか会ってみたいものです」

アルトリアの思いは本物なのだろうか先程からクエストボードをチラチラ見ている…きつと自分ほどの程度のクエストに挑戦出来るのかを早く知りたいのだろう。

「ふふふ、アルトリアもクエストボードに触ってみなよ」

「は、はい…では……」

恐る恐るクエストボードに触れるとまた、ウオン…という音がしてアルトリアに最適なクエストが表示された。

☆☆☆☆☆☆☆☆

インプの洞窟を攻略せよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

魔星獣を同時に30体討伐せよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

洞窟の幽霊を討伐せよ。

「二人の実力で星10に行けるなんて、スゴイじゃないか！」

「アバター化した事で多少のステータスダウンはしていますが生前、戦場で培ったものですからね。」

機械的な評価ではありますが、嬉しいものです」

誇らしげな顔をしているアルトリアを見ると、本当にあのアーサー王なんだと思わされる。

それはそれとして…

「幽霊の討伐？こんなクエスト見た事ないよ…なんなんだろう」

「一度受けてみますか？」

「どうだろうね…アルトリア一人で行けるクエストだから私がいれば多少は楽になると思うけど…」

「じゃあ受諾でいいですね？」

幽霊…そういえば以前、友人から聞いたことがあるな…：何か関係あるのか？

と少し思うところはあるのだが、星10の報酬は9に比べて一気に難易度が上がる事もあり相当な報奨金が貰える…：金の魔力と家計簿がヤバイ（主に同居人の所為）という事もあり素直に協力する事にした。

……

「ここが例の洞窟か…確かに怪しい雰囲気はあるね…」

「そうですね、ここからは気を引き締めて行きましょう」

洞窟の中には光る石があり、それのお陰で暗闇の中を歩く必要は無さそうだ。

『ガルルルル!』

「せいっ!」

『グギャアアア!!』

襲ってくるモンスターを適当に討伐するアルトリアと玲。

雑魚モンスターが何体集まったところで雑魚モンスター程度では傷すらつけられないだろう。

「流石アルトリア、この程度のモンスターは訳ないね」

「レイも、さすがですね」

といった感じで道行く魔物もバツバタとなぎ倒して行った。

この程度のレベルなら簡単にクリア出来るかと思っていたのだが

...

「待たれよ、御婦人」

「!?!」

突然後ろから声をかけられた。

別に普段なら驚く事でも無いのだが、星10の高レベルなクエストであるため、いつ何が起こっても対処できるように警戒を緩めていなかった二人に気付かれず、男は突然現れた。

「何者ですか!?!」

「何処にいるの!?!」

「いやはや、この様な陰鬱とした場所には似つかわしくない花が二輪  
…如何様でここへ参った?」

長い藍色の髪をポニーに纏め、侍の様な格好をした男がスウ…つと現れた。

まるで、幽霊のように。

「…そんな女性に向けちゃいけない空気を纏ってちゃ折角の口説き文句も台無しだよ?」

「ふっ…お主こそ、強がってはいるが足が震えているぞ? 武者震い…という訳ではなさそうだが?」



その男の言う通り、玲の足は剣気に気圧されてガタガタと震えていた。

以前、あの黒騎士から感じられた恐怖に近い物がこの男にはある、ということとは……

「アルトリア……もしかしたらこの人って……」

「ええ、そうです、彼は……」

「おお、拙者とした事が名乗っておらんんだ……いや申し訳ない……」

男は背中から身の丈はあろう長い刀を取り出した。

「……アサシンのサーヴァント、真名を

『佐々木 小次郎』と申す……その女子はセイバーだな？ 一手仕合ってもらえまいだろうか？」

佐々木 小次郎……存在していたのかがハッキリとしていない日本の大剣豪、その剣は

飛行中の燕をも切り捨てると言い伝えが残っている程の人物である。

「いいでしょう……セイバーのサーヴァント、『アルトリア・ペンドラゴン』その勝負、受けて立ちます」

対するはアルトリアは、聖剣と耳にすれば一番最初に誰もが出すであろう、エクスカリバーの担い手。

「では参ります……」

「いざ尋常に……」

「勝負!!」

とは言ったものの、睨み合いを続ける侍と騎士……本来の歴史ならばあり得ない組み合わせのカード、アルトリアには申し訳ないのだが玲は少しばかり興奮してしまっていた。

「いつまでも睨み合っていては仕方ありませんね……行きます！」

駆け出し、剣を振るってきたアルトリアの攻撃を軽くいなす小次郎。

西洋の剣は相手を重量を生かして『叩き』切る為に鍛えられたもの。

日本独自の剣である刀は、その鋭さによって『斬り裂く』事を重点において作られている。

普通ならばその特性上、刀で受け止め続けては耐久力の低い刀が先に参ってしまい折れてしまうのだが、小次郎の技巧によってその耐久力の差は埋められてしまう。

「ふむ…流石はセイバーと言ったところか、よもや女の身にしてここまで剣技を身に付けるとは……」

「アサシンの身にしてここまで剣技を身に付けている貴方には言われたくはありませんねっ!」

アルトリアは反撃を許さないラツシュで小次郎を攻め立てる。

だが、そのどれもがことごとくいなされ続ける。

「いや何、拙者など我武者羅に剣を振るい続けた只の凡夫に過ぎんよ」  
小次郎自身は自分を『凡夫』と言っているが、下手をすればセイバーとして召喚されたアルトリアよりも剣の腕前では上なのかもしれない、そんな焦りが一瞬だけアルトリアの攻撃を鈍らせてしまった。

「しまっ……………!」

「隙を見せたなセイバー……秘剣、燕返し!」

「……っ!?!」

リイイイイン…という甲高い音が洞窟内に鳴り響く。

小次郎の放ったほぼ同時の二斬撃をガードでは間に合わないと直感的に判断したアルトリアは咄嗟に後ろに飛び跳ねる事でなんとか躲すことに成功した。

「ふむ…やはりこの様な洞窟内では足場が悪い。

いやしかし、流石は聖剣の担い手といったところか、拙者の見てきた世界が余程小さかったと見える」

離れたところから見ている玲には何が起こったのかが良く分からなかった。

アルトリアが剣を振った瞬間に小次郎の剣が消えた……その後アルトリアが大きくバックステップしたようにしかみえなかった。

それはアストルムで名実共にレベルアップした玲にも見えない速度での攻防。

これが常人には介入できない超人同士の殺し合いだった。

「常人には見切れない程の2斬撃ですか…まさに魔剣、といったところ

ろですね…」

「いやはや、足場が不安定で完全な燕返しを披露する事が出来なんだ、決して手心を加えた訳ではない、許せ」

「アレで全力ではないだど!?…：…ならば次はこちらがその涼し気な顔を歪ませて見せましょう!」

「はっ!」

下段、中段、斬り上げの三段攻撃。

だが小次郎は紙一重の所でスルスルと避けている。

アルトリアはそれに続く形で怒涛のラッシュを続けるも、小次郎に当たる気配が全く無い…

「まさに妖精の演舞…見惚れている内に斬られてみるのも乙かもしれないなあ…」

「ならば早々に切られて下さい!」

「…：…む?徐々に威力が増しているようだな」

アルトリアは自身のスキル、魔力解放を用い

徐々にだが攻撃力を上げていた。

それは着実に小次郎との差を埋めていった。

「…：…ぬうっ!凄まじく重い斬撃よのう」

重く鋭い剣戟をなんとかいなしてやり過ぎしてはいるが小次郎の刀は元々受ける為に作られたものではないので剣と腕、両方に衝撃が伝わる。

その攻防を見た玲は好機と悟り、援護しようとして魔力をチャージする。

それに気が付いたアルトリアは、玲を止めるべく叫んだ。

「レイ!これは騎士同士の戦いですっ、手出し無用!!」

「相手は騎士じゃないからセーフ!

「ツイスト・スライサー!」

「レイ!」

アルトリアの懇願虚しく小次郎に向かっていく風の刃…しかし、その風が小次郎に当たる事は無かった。

「すまん…：宮子」

「仕方ないの、やってやるの」

どこからともなく聞こえてきた声と共に黒紫の魔力が風の刃にぶつかり相殺した。

「相殺…された？」

玲は自分がかんりの上級プレイヤーだと自負しているので、出処の分からない謎の攻撃に相殺されたのが少なからずショックだった。

小次郎も一旦仕切り直しといったところか、距離を離してこちらを牽制し続けている。

あと、アルトリアが玲を睨んできてる。

「むー……」

「ご、ごめんってアルトリア」

「レイが横槍入れた……」

「ホントにごめん…そうだっ！何か一つだけ言う事聞いてあげるよ！」

「じゃあ今日の夜は豪華な食事を所望します。あと、今後はセクハラ禁止です」

「前半はわかったよ…はあ、食費が……」

でも後半は断る、一つだけだし」

え〜！と言いながらプク〜と膨らませたアルトリアの頬は、さながら普段の大食も相まつたてこ焼きにしか見えて仕方なかった。

そしてそんなやり取りはあちらでも…

「む〜……」

「す、すまぬ宮子」

「プリンくれなきや許さないの〜」

「こ、心得た…然る後、道具屋で購入して来よう。

何、宮子の為だ…拙者にとつては造作もない事よ」

「むしろ、お使いすら出来なかつたら小次郎はただ言葉遣いが侍っぽいだけの痛いサーヴァントなの〜」

「ぐふう…心に響く……」

あちらはあちらで、突然出てきた謎の少女に侍がへこへこ頭を下げている姿が非常にシニールで可哀想だった…

白い髪をツーサイドアップに纏めた少女は手が出ていない…所謂、萌え袖というものをブンブンと振りながら小次郎を怒鳴りつけていた…見ていて、やはり可哀想だった。

「まったく、レイはマスターとしては優秀なのにガミガミ！ガミガミ！」

「ちらっ…（助けてよ！戦闘再開すれば止まるでしょ！佐々木小次郎なんでしょ!）」

「小次郎は門番すらマトモに出来ないダメサーヴァントなの〜」

「ちらっ（これは…拙者に惚れたな？敵として相見えていなければ…）」

お互いに全く通じていないアイコンタクトを続ける小次郎と玲、二人とも怒られすぎてシヨボンとして来たのか剣を離して正座で怒られている。

「レイ！聞いているのですか!？」

「…ご、ごめ…さいっ！ぐすっ」

「レイ!？」

「ごめんねアルトリアー！そんなに怒ると思ってなかったんだー！うわあああああん!!」

「あ、あわわわわわっ!…ご、ごちらこそすいませんでしたー!!もうちよつと洒落として受け取るものだと思ってましたー!!」

「ぐすっ…許して、くれる?」

「し、仕方ないですね…」

「アルトリア…ガシッ！」

「レイ…ガシッ！」

抱き合う二人、アルトリアは昨晚のトラウマを克服したのか、自らも玲の背中に手を回して熱い抱擁を交わしている。

そんな二人をジー…つと羨ましそうに見ている小次郎が行動にでた。

尚、戦闘行為ではない。

「宮子」

「なんなの、カス侍」

「……せ、拙者の背中にプリンがあるのだが前から背中に手を回して取ってもらえるか？」

「……背中にプリンがはつつく訳ねえだろ、寝言は英霊の座に戻ってからほぎけよ……なの」

「……………侍たるもの涙を流しては……」

宮子のあまりにも辛辣過ぎる言葉に心がへし折れた小次郎、それを哀れに思ったのか、玲がポンっと肩を叩きながらフォローを入れた。

「大丈夫だよ、君の背中にはプリンがくっ付いてるよ」

「小次郎の中だけではな、なの」

「……………」

予想だにしないコンボ攻撃を喰らった小次郎は先の戦闘でアルトリアよりも優位に立っていたのが不思議に思うくらい真っ白に燃え尽きていた。

「ですが玲、こうは考えられないでしょうか……背中にくっ付いてるのではなく、背中から生えてくるのだと」

「お、お前のサーヴァントも中々のものなの……」

「アルトリア……」

むふんつと得意げになって胸を張るアルトリアが印象的だった……